若き挑戦者たち・国土を支えるシビルエンジニア
―教育企画・人材育成委員会／マネジメント教育小委員会活動成果紹介―

武蔵工業大学　正会員　○皆川　勝
高知工科大学　正会員　草柳　俊二

１．はじめに

マネジメント教育小委員会では、日本の建設産業の実態、日本人の価値観、現存する社会システム等をしっかりと見つめ、日本の実態に適合した建設マネジメントの構造を組み立てて、本書を作った。中学生から、高校生、高等専門学校生、大学生にいたるまで、建設マネジメントの入門編テキストとして読んでもらえるものを目指し、作られたものである。本書が、広く建設マネジメント教育に使用され、多くの若者が建設工学の真の姿を、そして、そのすばらしさを知り、建設技術者への道を歩み始めることを願っている。本稿では同書の概要を紹介する。同書は、矢野周平という若者が主人公である。彼がどのような経験を通して建設工学に興味を持ち、建設技術者になる道を選ぶようになったのかを物語っている。

写真-1　阪神大震災における被災状況

写真-2　琵琶湖疎水

２．自然の力と人間

東京に住んでいる周平が中学一年生の時、従兄弟の哲平の住む神戸と有可が住む淡路島で大きな地震が発生する。1995年の１月 17 日の早朝に発生した阪神・淡路大震災である。多くの尊い人命が失われたこと、災害復旧に多くの名もなき技術者たちが立ち上がったことを知り感銘を受けると共に、“人間の力”のすごさに感動をおぼえる。

３．社会資本整備プロジェクト

高校生になる前の春休みに、周平は再び神戸に行き、人々が復旧した町を見る。神戸からの帰りに京都で、周平は偶然に琵琶湖疎水というプロジェクトを知る。そして、工業高校の先生をしている叔父の健太郎から、人間の生活を支える施設を作る社会資本整備プロジェクトについて教えてもらう。第 3 代京都府知事の北垣国道や高瀬川運河を造った角倉良以、そして田邊朔郎の偉業の一端に触れるのである。

写真―3　田邊朔郎銅像

４．発展途上国での社会資本整備プロジェクトを考える

高校生になった夏休み、周平は父の慎介の出張に同行して哲平、有可と共にカンボジアを訪れる。そこで、村々に井戸を掘り、生活用水を供給するプロジェクトを見学し、健太郎叔父がいっていた社会資本整備プロジェクトの意味を実感

キーワード　建設マネジメント、社会資本整備プロジェクト、使命と倫理、環境マネジメント
連絡先　〒158-8557 東京都世田谷区玉堤１－28－1　武蔵工業大学工学部都市基盤工学科　ＴＥＬ03-5707-2226

する。そして、自分たちの国、日本が行っている国際援助プロジェクトについても学ぶ。ただ作るだけの援助でなく、継続的に自ら維持管理してゆくための教育を行う技術者の役割の重要性を認識し、さらに技術者の仕事が現地の紙幣や構造物名称にその名を残すほどの、感謝の念をもたれていることを知る。

５．歴史的な社会資本整備プロジェクトを考える

周平は高校の文化祭で、以前行ったことのある京都の琵琶湖疎水プロジェクトを題材にしたビディオ鑑賞会に参加する。このプロジェクトの意味、そしてプロジェクトを遂行した田邊朔郎という若い技術者に興味を抱く。この一大プロジェクトの実施計画が、大学生の卒業論文であったということに驚く。明治時代の若い建設技術者達とはどのような人達だったのだろうと周平は考え、京都に行って田邊朔朗の書いた卒業論文を調べる。朔朗の論文が全て英語で書かれているのを見て、周平は明治時代の若者が持っていた使命感といったものを強く感じる。そして、苦労して原文を読みそれを理解しつつ、改めて若き田邊朔労が、決して特別な人間ではなく、情熱と使命感により、困難なプロジェクトを成し遂げたことを改めて実感する。

６．建設産業の実態と役割を考える

周平は建設マネジメントの講義で、日本の社会的変化、建設産業の実態、社会資本整備プロジェクトの意義といった様々なことを学び、大学に進もうと決心する。

７．環境とマネジメント技術

大学生になった周平は、建設プロジェクトについて深く掘り下げて考えるようになる。特に環境保全について興味を持つ。そして、実際の環境保全と取り組んでいる建設プロジェクトについて学ぶ。

８．建設技術者の使命と倫理

大学４年になった周平は、建設マネジメントの講義の締めくくりとして倫理について学ぶ。米国のスペースシャトルの実例や、技術士一次試験の問題等を通じて様々なケーススタディーが行われる。

９．おわりに

同書を読んだ若者が、日本の社会、さらには、世界の人々の生活支えるためのインフラストラクチャーを造り守ってゆく建設技術者として活躍することを、執筆者一同願う。

写真-4　カンボジアにおける国際協力事業

写真-5　カンボジアにおける井戸掘削

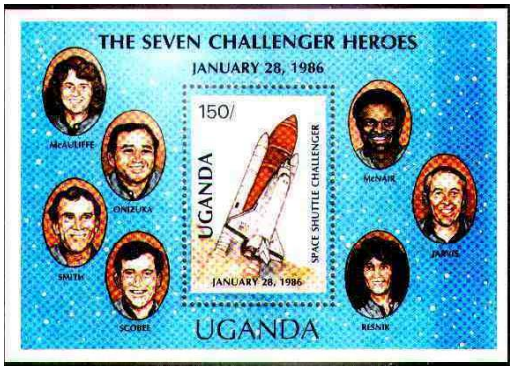

写真-6　スペースシャトル事故の尊い犠牲

写真-7　新潟県中越地震による被災状況

なお、本稿は、同書の紹介をする趣旨から、同書のあらすじ及び本文記載事項から大部を引用している。なお、写真はすべて著者及び関係者が撮影している。

著者：草柳俊二（高知工科大学、委員長）、勝俣陸男（当時都市再生機構、幹事）、嶋田善多（電源開発）、早川裕史（長大）、皆川勝（武蔵工業大学）、山崎利文（高知工業高等専門学校）